

平成二十九年五月吉日初版作成

愛深く情におぼれぬ道

高嶋善三郎

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	3
過去に放った想念に翻弄されない・・・・・・・・	3
すべての苦悩と業想念を光に還元する・・・・・・・・	4
宇宙神と直接交流し、本心と業想念を見極める・・	6
肉体感情にコントロールされない・・・・・・・・	7
愛が感情の波を超えて、その感情を純化する・・	8
愛深く情におぼれぬ道・・・・・・・・	9

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(電話) 〇四―七一二二―三七五二

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

はじめに

最近ある集会で、はじめて会に出席された方から、死ぬのが怖いのは何故なのでしょう。貧乏はつらい、どうしたらよいのかなどの質問がありました。これらの疑問は私たちが有意義の人生を送っていく上で、解決しておくべき根本問題でしょう。

死ぬのが怖いのは、人間は五感六感に観ずるもの以外何もなっていないという肉体観によるもので、肉体がなくなると、何もなくなっていくという恐怖から生じているのです。それは、また人間は肉体のほか、永遠の生命の存在即ち自由自在の神霊でもあるという真理を忘れてしまっているからだとも言えます。またその真理を受けて貧乏や不幸や病気をどのように受け止めていけばよいかを理解し、真実の生き方を実践していけば、貧乏や不幸や病気はつらいが、決して恐れるものではなく、貧乏や不幸や病気のつらさは癒され、運命は開かれていくのです。

その具体的な生き方は、『人間と真実の生き方』に示されていますが、その真理を正しく解釈することが、とても大切になります。この生き方のなかで示されている「すべての苦悩は、人間の過去世から現在に至る誤る想念が消えてゆく時に起こる姿である」の行について、どのように解釈したらよいのか、また自由自在の神霊意識をどのようにしたら取り戻すことができるのか、さらに苦悩を意味する、不安や恐怖等の感情想念に

コントロールされないとはどういうことなのか、何に留意して生きていけばよいか五井先生や昌美先生がどのように解説されているのかを整理してみたいと思います。

過去に放った想念に翻弄されない

消えてゆく姿で世界平和の祈りの行を成功させるポイントは何でしょうか。消えたと思ってもまた同じようなことが起こってくるのですが。これは自分の祈り方が足りないからでしょうか。

それについて整理してみましよう。素直にやればよいのですが、目の前に不調和な現象、病気、貧乏や不幸を目の前にする不安恐怖等の苦悩が襲い、どうしても心が動揺してしまい、再び消えてゆく姿の因（もと）を作ってしまうがちなのです。この状況をうまく処理できればよいこととなります。

昌美先生は、目の前に現れているのは、過去世から現在にいたる誤る想念が現れて消えてゆく姿で、それをどのように対応していけば、良いかを『果因説』として示してくださいっています。

果因説は過去の因果で未来はきまらないという真理によるもので、過去にこだわる必要がない。自分の現在も未来も、自分の自由意志と創造力によって、いかようにも創り出してゆくことが出来る。切り開いてゆくことが可能で、また、変えること

も自由に行えるのである。

過去が現在に影響を与えているという潜在意識を取り除くために、時間は過去から未来へ流れてゆくのではなく、未来から現在、過去へと流れてゆくのであると説かれています。今この瞬間未来について思ったこと、考えたことの『成就』は、いずれ現在にやってくるのである。そして今現在、この瞬間、同じことを観念でやるのではなく、意識をもって繰り返しインプットすることにより、時間はどんどん未来から現在、過去へと流れてゆくのだと解説されています。

問題を解決するためには、過去に遡り、失敗や不幸の原因を探り出すのではなく、まさに今の瞬間、自分の未来に関する希望や出来事、そして輝かしい人生の設計図を強く思い、“成就” “必ずなる” “絶対大丈夫” “すべては可能” “すべては完璧” “すべては大調和”・・・など光明の言葉を心の中に、魂の中に強くインプットすることであり、それによって自らの人生の未来に刻まれたことになり、それが現在に流れてくるとされたのです。過去に遡り、失敗や不幸の原因を探り出すことは、そこに莫大なる時間とエネルギーを割き、その上突き止めた原因により、新たに否定的感情想念を引き起こしてゆき、因果の循環から抜け出すことができないのだと言われているのです。

すべての苦悩と業想念を光に還元する

この想念の対処方法について、ある人から念力ではないかといわれたことがあります。

しかし、念力ではないのです。

人間は神の子であり、本来完全性であって、悪や不幸や病気等々の苦悩は、過去の誤った想念行為の消えてゆく姿である、という真理の言葉を肯定し、その業想念を常に消し去ってこれている守護の神霊への感謝行をつづけてゆくという五井先生が示された方法を継承しつつ、過去の誤った想念行為の消えてゆく姿への把われを出来得る限り最小にするための方法を提唱されているからです。

また、苦悩や誤てる想念の消えてゆくものについて、その現象の本質を理解できれば、容易く対処できるものです。

『人間と真実の生き方』にある「この世の中すべての苦悩は、過去世から現在にいたる誤てる想念がその運命となって現れて消えてゆく時に起こる姿である」行（くだり）について、整理してみましよう。

① 誤てる想念とは、五感六感に観ずるものの他は無いと思うさかさまな考え方や、真実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような誤てる思い方やそれにより生じ

た想念です。

② 苦悩とは、不安恐怖を象徴する感情想念であり、誤てる思いの仕方やそれにより生じた業想念により、神である人間が肉体人間になりさがり、即ち自身を光の側ではなく、闇の側に置いてしまい、闇の崩れてゆく姿を自身の崩れてゆく姿と同視してしまい、神の光、靈性を離れ生じたものです。

③ そしてその運命とは病気や不幸や病気など縁により現れた姿をさします。

④ 誤てる想念（業生）と、その運命と現われていく病気や不幸や貧乏との関連性について、『老子講義』第九講において次のように宇宙科学の原理から解説されています。

宇宙の根源の素粒子である宇宙子は、常に新たに宇宙心の中から放出されており、古い宇宙子は、次々と役立っては消滅してゆくことになっている。そして宇宙子というのは精神的な波動となっている宇宙子となっているものも、物質的な波動となっているものもあり、この精神と物質の調和によって、この地球世界も成り立っている。この精神と物質の宇宙子は、常に新陳代謝しているのであり、瞬々刻々古いものと新しいものが代ってゆくのである。この原理を知らないで、いつまでも古い自己や事物に把われていると、その古い自己なり事物なりを消し去る為に、新しい宇宙子が次々と宇宙心から送りこまれて参りまして、嫌でも応でも、新陳代謝させられてゆくのである。そのように、古い自

己の習慣性、古い事物への執われの想念波動が、消されてゆく姿として、病気や不幸や、国と国との間では戦争などという、弊（やぶ）れる状態が起こってくるのである。五井先生は、これを消えてゆく姿といわれ、すべて新陳代謝の原理によるのであり、恐れる必要はない。それは常に自己なり、人類なりを高め深めて、真実の神の子と成し、神の世と成すための神のみ心であるからなのである。すべての人々が、永遠の生命にそのままつながり得て、滅せず傷つかずの真（神）人としての誕生を、神々は願っているのであって、その為に救世の大光明という地球人類救済の大きな慈愛の力が現在地球に働きかけているのであるとされています。

一見最悪の状態である病気や不幸や貧乏の姿を通して、誤てる想念（業想念）と苦悩が消えてゆき、それに従って真実の神の子と成っていくと言われているのです。そしてこの原理をはっきり理解することにより、はじめて運命と現われた病気や不幸や貧乏の体験は、これから真実の神の子と成っていくための教訓あるいは原動力だと受け止めることができるのではないのでしょうか。この整理ができて、はじめて過去世から現在に至るまでに生じた業想念や苦悩と、病気や不幸や貧乏等の運命とを切り離して受け止めることができ、心を動揺させなくなるというのではないのでしょうか。苦しい体験を想い起すたび、苦悩を想い起こし、動揺することはなくなるのです。大難を小難に

していただいた、あの体験が自分を成長させてくれたのだと喜びを持って思い起すことができるようになるのではないでしょうか。

消えてゆく姿で世界平和の祈りを有効なものにするには、運命を冷静に受け止め、誤てるこの思いの仕方を改め、過去世から現在に至るまでに生じた業想念と苦悩に焦点を合わせて、光に還元していけば、貧乏や不幸や病気のつらさは癒され、安心立命を得、運命は明るく、開かれていくのです

宇宙神と直接交流し、本心と業想念を見極める

昌美先生は、自由自在の神霊意識を取り戻す方法とその効果を有効にする道を示されています。

昌美先生著の『次元上昇』に解説されています。ここでは神霊意識を取り戻すことを、直観力を身につけることだと言われています。この直観力は神霊意識を象徴すべきもので、神我一体にならないと現われないのです。実は神としての人間が宇宙神への想い（感謝）を疎んじ、肉体人間に成り下がってしまった、即ち誤てる想念の思いの仕方しかできなくなったために忘れてしまったものなのです。

それではその内容を要約しますと、次のようになります。宇宙神と直接交流し、自らを開発する（チャクラを開く）、即ち直観力を完璧に身につけ、チャクラを正しく開けば、ひら

めきに添って能力が現われる。

直観力は、ひらめきであり、心に直接的にひびいてくるもので、特に必要な直観力は、否定的観念、暗黒的想念の波動を見極める直観力だと言われています。これが養われてくると、神の叡智をキャッチできるようになると言われています。

そのためには、まず、自らが放つ想念と波長が合う、周りの想念を引き寄せくるので、祈り、自らの想念を浄める。そして日頃の自らの想念のあり方として、すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的想念や言葉は、死語にしていくことを勧められています。

否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める直観力が、大いに養われてくると、自らの本心が放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けなくなり、すべては完璧にうまくいく。幸せて、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくれると解説されています。

以上の直観力が大いに養われて現れてくる変化は、チャクラが正しく開かれた時に現われる私たちの心境の変化について解説されている箇所とあわせ読むと、より実感をもって理解できるのではないのでしょうか。

その箇所は、『白光誌』2010年3月号「神人とチャク

ラ」において、昌美先生は、チャクラは正しく開く必要があることについて次のように言われているところです。それを見てみましょう。

チャクラが開いたときに現われるのは、予知能力ではなく、また予言する力でもない。自らの目を通して神を見、また自らの耳を通して神の声を聞くことができ、自らの肉体もすべて整っていることが判るようになるのである。さらに、神とつながるチャクラが開くと、神のバイブレーションがあることが判るようになり、感覚が微妙になり、風景も輝いて美しく見えるようになり、また音も味も、妙なる美しいものが感じられる。そして、自分たちだけが素晴らしいのではなく、すべての生きとし生けるものが全部つながっていることが実感できる。三次元世界にいながらにして、神界に生きられるようになるのである。

一瞬にしてすべてが神そのものとなってしまうえば、神の心が自分の心として判り、神のなさしめることが自然に判るのである。聴こえてくるものは「絶対に大丈夫。すべてが光に包まれているし、人類の行方はすべて一つである」という神の言葉であり、そして自分もいつの間にか、自らの言葉を通して神の言葉——人類が本当に行き着く美しい場所を、知らないうちに語っている。即ち神人たちは自分自身の姿を通して究極の真理を示すのである。「自分自身が完璧に神とつながって一光なのだ、すべては一つなのだ、すべては破壊されることなく、神様の中

に包まれて生かされているのだ」ということを実感し、それぞれが神人としての輝かしい生き方を示すことを示すことによって、世の中が自然に変わってゆくのであると言われています。

肉体感情にコントロールされない

直観力を取り戻す上で、また取り戻しても特に留意する点は、肉体感情にコントロールされないということです。

2014年3月号で、昌美先生は、「私たちは宇宙神の根源に直結し、我即神也の自分が表に出て、もう肉体感情にコントロールされない。すべてが成就する世界が、自分自身の魂によって出た」と言われています。

「本日、五井先生は皆様に「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した」とおっしゃいました。ということとは、我即神也の自分が表に出て、もう肉体感情にコントロールされない。すべてが成就する世界が、自分自身の魂によって表に出たということなのです。今までは、魂の我即神也の自分が奥へ引っ込んでいたのです。

そして苦しい、悲しい、恐怖だ、怖い、不可能だ、出来ない、駄目だという感情の想いで自分がコントロールされ、この肉体は操られてきた。ところがここにいる人、世界中で祈っている人は、我即神也が自分をコントロールしている、ですから、不可能などない、というのが当

たり前になっているのです。『白光誌』2014年3月
16ページ)

このお言葉から考えれば、魂の我即神也の自分が表に出る前は、人によって多少の差はあるものの、肉体感情にコントロールされていたということでしょう。言い換えれば、肉体感情をコントロールしようとしても、魂の我即神也の自分を表に出すまではコントロールできなかつたとも言えます。

愛が感情の波を超えて、その感情を純化する

では、人間が肉体感情にコントロールされやすいのは、何故なのでしょう。

愛とは、明るい把われのない心、いつも神のみ心の中に入っている想いから発する本質的な生命力である、光が分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方である。それが縦に働くと神への信となり、横に働くと隣人愛、人類愛となる。

愛は光そのものであるから、電流が電球を通さないと光を現わせないので同様に、肉体の人間世界に働く時は、感情想念の一つである情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を發揮することが出来ない。愛が感情の波に蔽われてしまえば、それは執着となつて、愛の心をマイナス面にひきず

っていつてしまおうが、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きだしたときには、その感情は光となつて、相手を照らし、人類を輝かすのである。それが出来ないのは、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きだすことがなかなか難しいからと言えます。

愛が感情の波を超えて、その感情を純化するとは、愛が肉体を通して、不安恐怖等の感情に執着せず把われずに愛の本質である光、即ち生命そのまま伝わってきたことによる輝きである喜びに変えることといえます。このことを、感情想念を光に還元するといひ、我即神也の真理を知らなければ、到底実現は不可能であると言えます。

「光とは明るい把われのない心、いつも神のみ心の中に入っている想いから発する本質的な生命力であり、愛とは分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方である。それが縦に働くと神への信となり、横に働くと隣人愛、人類愛となるのであって、その根本は自己が神の分かれである本質を知っている者の行為なのである。光の働き、愛の心がすべての行為の根本になつている人が悟つた人である。」

愛が感情の波に蔽われてしまえば、それは執着となつて、愛の心をマイナス面にひきずつていつてしまおうが、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きだしたときには、その感情は光となつて、相手を照らし、人類を輝かす

のである。

愛は光そのものであるから、肉体の人間世界に働く時は、感情想念の一つである情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を發揮することが出来ない。それは、電流は眼に見えなくとも流れているのだが、電球という器を通さないとその光がわからないようなもので、本来の光を肉体界の波長に合わせて、肉体界に流れてきて、光本来の役目を果たしてゆくことが、この地球界における愛の働き方なのである。そこで肉体人間の世界では、愛と愛情とはほとんど同じ意味で使われている。

だから悟った人は自己中心の感情、即ち業想念感情はないが、他の人の感情は人一倍感じるもので、その感情に執着せず把われずに、常に愛の本質である光に変えてゆき得る人なのである。自己の中に他の人の感情のひびきを受け入れる要素がなくして、他人のために働くという気が起こるわけがない。愛の働きが出来よう筈もない。悟った人、あるいは覚者と云われる人は、業想念の波の中に生活しながらも、その業想念に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し得る人、つまり、その人の一挙手一投足が、神の子の本質である、愛と真の人であるというわけである。(『宗教問答』問80 悟ると全く感情が亡くなってしまうのですか251ページ)

愛深く情におぼれぬ道

また魂の我即神也の自分が表に出て、肉体感情にコントロールされない状態になっても、肉体感情には常に留意する必要があると、五井先生は言われています。

「愛はすべてを癒すのである」

すべての不幸を打開するのは、愛の心が根底にある行動である。

私の祈りは、愛の祈りである。智慧は愛のうちに含まれていると私は思っている。

ただし、愛とは情ではないことを申し添えて置きたい。情は愛から生れたもので、愛情と一つに呼ばれているように、愛とは切っても切れぬ関係がある。そのため、仏教では、愛さえも業と呼んでいて、迷いの本体である、と説いている。そして神の愛を慈悲と呼んでいる。私がか今まで愛と書いてきたのは、情(執着)ではなくて、英語でいう Charity (大慈悲心) のことである。しかし、愛は善で、情は悪である、と簡単に割り切ってもらっては困る。この現世では光に影が伴うように、愛には情がつきまとうのである。切りがたい情を涙を吞んで断ち切つてゆくところに、人間の美しきがあり、愛の輝きがいやまずのである。

情を簡単に切れることが、その人の冷酷性の現われで

あったら、情に捉われやすい人よりなお悪いことになる。

愛深い人が情におぼれぬように自重してゆく姿には、美があるもので、そうした人の動きの中に、神のこの現象界における生き方が示されているものと思われる。

私の祈りは、自分が相手と一体になって、相手を抱いたまま、神の世界に昇ってゆこうとする祈りである。

祈りとは、まず自分の心を空っぽにすることである。

それまでの自分をひとまず捨てて、神だけを自分の心に住まわせることである。」(『神と人間』95ページ)

注目すべき箇所は、前文の太字の箇所である。

愛と情との切りがたい関係を涙を呑んで断ち切ってゆくところに、人間の美しさがあり、愛の輝きがいやます生き方を五井先生は私たちに示してくださいさっているのです。具体的には、前項の五井先生のお言葉の、悟った人の生き方になるのではないでしようか。つまり自己中心の感情、即ち業想念感情はないが、他の人の感情は人一倍感じ、その感情に執着せず把われずに、自他一体となって光の中に入り、感情想念を常に愛の本質である光(喜び)に変えてゆく生き方、即ち愛深く情におぼれぬ道を示されていると言えるのではないでしようか。

この道は、心が平和で、あらゆるものに把われがない。自由自在に動ける、という世界にいくために、お釈迦さまが言葉で

「教えられた、肉体のあらゆる五感六感の想念波動を超えていく方法や、イエスの“汝らの内なる神の国を觀よ”という教えに通じます。

「神さまの思う通りというのは何か、その前に神さまという世界というのは調和している。みんな仲よくしている。心が平和である。あらゆるものに把われがない。自由自在に動ける、という世界です。そういう世界に行くためには、肉体のあらゆる五感六感の想念波動を超えていかなければならない、という方法をお釈迦さまは言葉で教えたし、体でいわゆる統一して座禅觀法して教えられた。イエスなどもそうです。

“汝らの内なる神の国を觀よ”、自分の内に神の国がある、心の中にあるんだから、それを觀なければだめだ、と言って教えているわけです。」(『心貧しき者は幸いなり』五井先生著68ページ)

この道を行んだ時、どのような心境になると五井先生は言われているのでしようか。

この道は『老子講義』第十三講「無極に復歸す」において、解説されている、白きを知り、黒きを守る生き方(高い真理を知り、凡愚の世界の生き方に順応して、自己も凡愚の一人となつて、すべての人々の生き方を自己のものとして、社会人類の為に働いていく生き方)にも通じます。これにそって考えますと、

天下の範(式)となれば、常德忒(たが)わずして、しーんと静まりかえた、空の奥の又奥の、と五井先生が老子という詩で書かれた、あの深い、どこまでも深い、真理の光の放射を遡って遡って、窮極のところ、無の極地に復帰する心境となるのではないのでしょうか。

そして、『老子講義』第二十七講においてその本源の世界に達したときの心境(玄徳の心)について、次のように解説されています。

自然の美や、無心なものにひかれている時の輝くような瞬間、愛の心に触れた時の喜び、それらの心の状態は、頭脳を駆け巡る想念波動からくるのではなく、そうした想念がどこかに鎮まりかえった時に、本源界の生命の光が、そのまま伝わってきたことによる輝きである喜びである。玄徳の心というものは、そうした輝きや喜びを、瞬間的に味あうようなそういう心の状態でもなく、そうした本源世界そのままが、常の状態としてあるので、特別に輝きを感じ、喜びを感じる、という境地をはるかに超えているわけである。玄徳の心というものは、そうした輝きや喜びを、瞬間的に味あうようなそういう心の状態でもなく、そうした本源世界そのままが、常の状態としてあるので、特別に輝きを感じ、喜びを感じる、という境地をはるかに超えているとされています。

老子の言われる玄徳の心は、私たちが最終的に達すべき目標といえるものでしょう。しかしおそらく愛深く情におぼれぬ道

を求め歩んで行くうちに、無意識のうちに現われる心境といえるのではないのでしょうか。

五井先生の愛深く情におぼれぬ道は、救世の大光明という地球人類救済の大きな慈愛のもと、お釈迦さま、イエスや老子の教えを踏まえ、現代人が日常生活のなかで心が平和で、あらゆるものに把われがない。自由自在に動ける、という世界にいく生き方といえるのではないのでしょうか。

その生き方は、また昌美先生の、「みんなですべての違いを超える」神性復活の道につながっているといえます。

このような生き方は、到底無理だと思われる方がおられるかもしれませんが、真理を明確に理解し真実の生き方を実践すれば、従来に比べようもないほど、短期間でこの生き方を手にすることが可能になってきていると言えます。それは、当白光真宏会が地球を救済、守護する神々の神庭会議で、宇宙神から直接宇宙究極の光を降ろされる唯一のグループに選ばれ、この二十数年間、私達の祈りを通じ毎月富士聖地に降ろされ続けた宇宙究極の光、エネルギーにより、本年当聖地は五次元の扉が開かれ、「果因説による大成就の共磁場」が創りあがっているからです。あとは、私達の確信と実行があれば、実現されることでしょう。